

出穂前までの畦畔の草刈りと 適切な水管理・適正な穂肥の

施用で良質の「たんなん米」を!

○ 倒伏対策 (コシヒカリ)

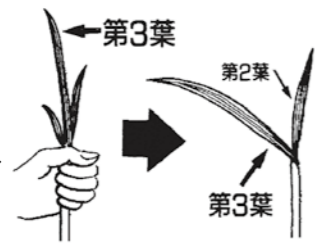
倒伏は、品質の低下、収穫のロスを生産面では大きなマイナスになります。大きな要因としては、「密植・過剰分けつ・窒素過多・徒長苗の植付・ケイ酸分の不足・根腐れ・紋枯病」があります。倒伏が懸念される場合は、倒伏軽減剤の散布を検討してください。

出穂前20日前後の上位第3葉の長さが45cm以上ある場合、倒伏の恐れがありますので「ロミカ粒剤」の使用を検討しましょう。

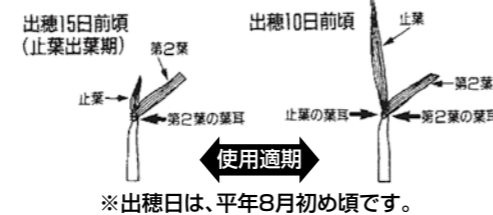
■ 上位第3葉の見分け方

(出穂前20日前後…平年7月10日頃)

葉鞘に沿って葉をまどめたとき
株元から最高位にある葉が
上位第3葉の場合が多い。



【出穂前の目安】



農薬名	使用量	使用時期
ロミカ粒剤	2~3kg/10a	出穂25~10日前

※5月半ば田植えでは、7月5日から20日頃が散布目安となりますが、早めの散布が効果的です。



ストップ!
農作業事故

農作業別の安全確保 1人作業編

農作業の機械化が進んで、1人作業が多くなってきました。他の産業でも1人作業が多くなってきていますが、鉄道やバスのワンマン運転では、何かの異常があれば、直ちに管理者と連絡が取れるようになっています。しかし農作業では、日々の作業場所は変わりますし、一日に数カ所の圃場(ほじょう)へ移動することもあります。列車のダイヤのように作業が進むわけでもありません。お昼休みや夕刻に時間通りに帰宅しないとかでご家族が捜しに行って事故になっていることを発見する場合があります。どんな事故でも同じですが、事故者を一刻も早く医療機関に運べばそれだけ救命率も上がり、入院日数も短縮されます。

もし1人作業で事故になったらどうするか考えましょう。現在はほとんどの地域で携帯電話が使えるようになっています。事故になったら、通話をして助けを呼ぶことができますが、機械の下敷きになった場合には、自分で携帯電話を操作することはできません。乗用農機では、携帯電話に傾斜センサーを付け、転倒などで異常な傾斜になったときに自動的に発信する装置も開発されています。そうでない場合には、一日の行動計画を玄関などの掲示板に書き込んでおいたり、定時連絡で無事に作業を進めていることを確認できるようにすると良いでしょう。営農集団では定時連絡手法が有効になるでしょうし、作業指示、燃料の補給依頼などにも便利になります。

農作業はプライベートの時間ではないので、行動を把握してもらうことは作業安全の面からは極めて意味のあることです。

携帯電話の圏外になるような場所での作業には、ホイッスルを携帯すると良いでしょう。ホイッスルを鳴らすことによって、通行者にも異常を感じてもらって助けてもらうことができます。事故はめったに起こらないものですが、万が一に備えておくことが被害を小さくできることを忘れないでください。



○ 7月以降の水管理

収量・品質・食味の三拍子揃った「たんなん米」を生産するためには登熟を向上させる事が重要です。幼穂形成期以降(コシヒカリ)、収穫間際まで間断通水を実施してください。

特に、出穂期以降は新根の発生がほとんどなくなるため、現在ある根を刈取り時期まで維持する事が登熟向上や収量・品質の向上に向けて重要になってきます。

【水管理のポイント】

- ① 穂ばらみ期から出穂期までは特に水を必要とするので湛水状態にする。
- ② 出穂期以降も間断通水を継続し、根の活力を維持する。
なお、出穂期から成熟期までの登熟期間が高温(日平均気温27℃以上)で推移する場合は、未熟粒や胴割粒の発生を助長するので、間断通水の間隔を狭めるなど気象や圃場条件に応じた水管理を実施する。
- ③ 台風の接近や通過が予想される場合は、事前に圃場への入水を実施し、フェーン現象による被害の軽減を図る。(台風通過後は速やかに排水する)
- ④ 通水は夕方から朝方とし、根の健全化につとめる。(日中は高温のため)
- ⑤ 天候の経過を見ながら、収穫間際まで間断通水を実施する。(早期落水厳禁)
(早期落水は、「胴割粒」や「未熟粒」が発生し、品質低下を招きます)

7~8月は、農業用水の計画的利用と節水につとめましょう。

< 異常気象対策 >

稲は気温が30℃を超えると光合成ができず、十分にデンプンを作ることができません。出穂後5~15日が最も高温障害に対する感受性が高くなり、この時期に影響を受けたお米は「乳白粒」が多く、品質低下を招きます。

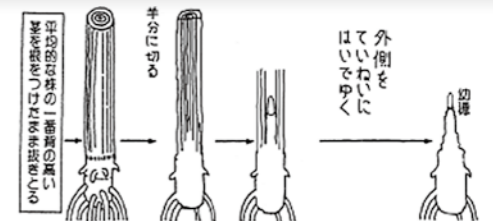
- 稲の過繁茂防止につとめる。
- こまめな水管理で根の機能活力維持を図り、夜間通水で圃場内の夜温を下げる。
- 登熟期に肥効が切れぬよう穂肥を適正に施用する。

○ 穂肥

【適期の判断】

穂肥の施用時期は、品種や生育状況によって圃場ごとに異なります。また、施用時期を大きく外してしまうと倒伏や減収の原因になりますので、正しい情報をもとに適期を判断する必要があります。

右記のように幼穂長を確認して、穂肥の施用適期を判断しましょう。



(『エコ追肥』:10a当たり)

【穂肥の施用量】

品 種	幼穂長	1株の茎数	葉 色	穂肥1回目	穂肥2回目
ハナエチゼン	2mm	—	—	15kg(6月下旬)	15kg(7月上旬)
コシヒカリ	15mm	22~25本(適正) 条間が手前30~50m くらいまで見える。	3.5	15kg(7月下旬)	15kg(7月下旬)
			4.0	10kg	15kg
		26本以上(多い)	3.5	10kg	15kg
		4.0	7kg	10kg	
		条間が見えない。	4.0以上	施用しない	状態を見て施用
あきさかり	2mm	—	—	15kg(7月中旬)	15kg(7月下旬)

【一括肥料の留意点】

田植え時に施用量を減らした圃場では、葉色・草丈の状態を見て1回目から2回目の穂肥時期に「エコ追肥」を追加で5~8kg/10a施用しましょう。